

棺を納めるだけの高さがないものが多くを占める。赤堀町達磨山古墳A・B号石室<sup>(1)</sup>などの組合式箱形石棺状の埋葬施設は側壁に河原石や割石を立て、「石室」高を1石でまかなえる構造である。飯綱山10号墳「石室」とは石材の使用方法が異なるが、「石室」高の低さのみに注目すれば、この種の埋葬施設が飯綱山10号墳「石室」にもっとも類似している。また、5-1)-(6)で橋本博文氏が指摘するように、群馬県地域では埋葬施設上の被覆が無いものやごく薄いものが認められる。上述の二つの類似点から、飯綱山10号墳「石室」は群馬県地域の組合式箱形石棺状の埋葬施設の影響を受けながらも変容し、それが石材使用方法の差に現出しているとも考えられよう。

本稿では、遺存状態の悪い資料に前提を重ね、今後の検討課題の指摘と共に敢えて復元した。さらに、その復元が妥当であるという前提の下に他地域との比較を行い、系譜に関して二つの可能性を提示した。今後の類例の増加や飯綱山10号墳「石室」の再調査を経ることで、飯綱山10号墳「石室」の系譜や周辺地域に点在するこの種の埋葬施設を持つ古墳の歴史的位置等について、さらなる検討が可能になると思われる。確実な資料を用いて実証的な検討を行うという側面からみると、極めて問題の多い拙文であり、推測でものを言っているとの誹りは全て受け入れたい。しかし、過去の調査によって不明瞭なところはあっても、飯綱山10号墳の実態を解明する上で、古墳の一属性である埋葬施設の系譜の追究は不可欠である。不確実な資料も厳密な資料批判を加えることによって地域史の再構築に用いていくべきではなかろうか。本稿における資料操作の誤りなど、問題点を御教示頂ければ幸いである。

なお、本稿を作成するにあたり、荒木勇次氏、富田和氣夫氏、富山市教育委員会学芸員諸氏の御教示を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げる。  
(小黒智久)

## 5 飯綱山10号墳1996年度の調査のまとめと今後の課題

新潟大学考古学研究室では、1996年8月5日より9月1日まで、新潟県南魚沼郡六日町余川字飯綱山に所在する飯綱山古墳群の発掘調査を実施した。これは、5世紀後半代の初期群集墳の実態解明を目的にしたものである。

今回の調査は、飯綱山古墳群の中核をなす10号墳と27号墳の1995年の墳丘測量調査の成果を承けて、①墳丘規模の確認、②周溝・葺石・段築・埴輪・ブリッジなどの外部施設の確認、③10号墳の主体部構造の追究、④築造年代の把握などを課題にした。以下に、調査の成果をまとめる。

### 1) 調査のまとめ

#### (1) 周溝

測量調査の結果から10号墳の場合は周溝が全周していると考えられたが、今回の1トレンチの発掘調査により、墳丘南東部では、上幅約4.2m、下端約2.6m、深さ約70cmの規模と、緩い弧状を呈し外側が急角度で立ち上がる断面形態が明らかになった。

#### (2) 段築

墳丘は2段に築成されていることが判明した。中位に旧表土があって、その上に盛土をして築

---

(1)達磨山古墳の埋葬施設などに代表される組合式箱形石棺状の埋葬施設は76頁の註(2)の概念規定からすると「棺」に相当するが、これまでは「箱式石棺状の竪穴式石室」などと呼称されてきたこともあり、ここでは混乱を避けるため、慣例に従って「石室」と呼称する。

いている。テラス面旧表土の上にローム質黄褐色土混じりの土を固く叩き締めて造っているとも考えられた。しかし、葺石根石部分がその下にもぐっている疑いがあり、その旧表土上のローム質黄褐色土混じりの土は流土の可能性も捨てきれない。しかし、ここでは流失し易い黒色土の面を粘性のあるローム質黄褐色土混じりの土で覆って仕上げたと理解した。特に、現場での所見として、その締まった固さを重視したものである。いずれにせよ、段築を持つ古墳としては新潟県内では稀なもので、北陸でも有力古墳の指標とされる(中司1998)。

### (3) 葺石

葺石が、下段の地山整形部分にはなく、上段の盛土部分にのみ存在する。それは盛土からなる崩れ易い墳丘部分の崩壊を防ぐ目的で葺かれたのと、下段の地山整形部分は丘陵下からは死角となって見えないために手抜き、省略されたためであろう。なお、ボーリング調査の結果、墳丘の山側、谷側から見て背面にも葺石が存在することが判明した。

葺石は径20cm前後の河原石を横位に積んでおり、等間隔の通し目積みではなく、下部に多くの通し目積みが見られる。葺き終わりの最上位は墳頂外縁部で、そこにはより大きめで偏平な石が用いられている。

ところで、葺石の有無や葺石の葺き方には階層が反映されている可能性が指摘されている(加部1998)。飯綱山10号墳の場合は、墳丘上段のみに葺石を葺く加部氏分類D類に相当し、葺石を葺いているものの中では最も地位が低い。ただし、こと北陸の古墳の中で見ると、越後25例中の4例ということで相対的には有力な古墳を特徴づけるものと評価される(中司1998)。しかし、隣接する上野と比較すると、その格差は如何ともしがたい。ただし、上野の中でも、その階層の差が必ずしも墳丘規模ときれいな対応関係をもっていないようである。

### (4) 埴輪

葺石の内側約20～30cmの墳頂外縁部には「壺形埴輪」<sup>(1)</sup>ともいうべき特異な壺形土器が約1.5m間隔で等間隔に据えられていたようである<sup>(2)</sup>。ここでは壺形埴輪として記す。それは口縁部が二重口縁で、底部は穿孔していないが、胴部に焼成前のあけび形の透孔が対向位置に2孔あくものである。大きさには若干のばらつきがあるが規格化され、形が近似し、容器としての土器に孔をあけて仮器化させており、しかもそれが複数・多量に、円筒埴輪と同様な位置に並置される様は埴輪的であり、まさに「埴輪壺」、「壺形埴輪」と言ってもよいものである。作りも、胎土に砂粒を多く含み、厚手で、調整が粗く、日常の土器とは異質である。別個体の多くに朽痕があるということは、同時期に製作していることを物語っており、シルエット様の黒斑の在り方からも近接して複数個体を同時に焼成したことがうかがわれる。一方で、内・外面調整に刷毛目が使用されず、殆どヘラナデ・指ナデで仕上げられており、前期というより中期的な土器の製作技法が見られる<sup>(3)</sup>。中には、内面をヘラミガキで仕上げている個体も存在する。埴輪というよりは土器的な作りである。恐らく埴輪作りの専門工人が製作したのではなく、土器作りの工人が製作したので

(1) 壺形埴輪の詳細に関しては、別稿を用意している。

(2) 置いてあったか、据えてあったかは、明瞭な据え方が確認できなかったので確実なことは言えないが、風雨などですぐ倒れてしまうほど不安定な小さな平底なので若干掘り窪めるなり、小さな石で支えるなりの安定を図ったものと想定している。もしも、掘り窪めたとしても、胴部の透かし孔が土中に隠れない程度の深さであったろう。今後の検討課題である。

(3) 藤川美和氏は、長野県内出土の「ナデ」を有する埴輪を集成している(藤川1992)。その多くが飯綱山10号墳とほぼ同時期のものである点は注目される。

あろう。中には、外面に赤色塗彩の痕跡をもつものも存在する。また、二重口縁ではなく、単口縁のものも、わずかであるが存在する。その両者がどのような関係で据えられていたのかは、原位置を保っていなかったので明かでない。ただ少なくとも個体数の差から二重口縁のものが主で単口縁のものが従という格差が存在していたと考えられる。ちなみに、北九州の老司古墳は前方後円墳であるが、後円部に主に二重口縁のもの、前方部に主に単口縁のものがそれぞれ置かれていたとされ、主体部のある後円部側の二重口縁のものの方が格が上であったとされる(大西1996)。はたして、円墳の飯綱山10号墳の場合、どのような使い分けがあったのかは今後の検討課題である。なお、二重口縁のものと単口縁のものとは製作技法上、後者が前者の口縁部段部から上の最終工程を省略したものと見られ、量産化の中で生まれたものと理解したい。この種のは、新潟県内では初めての確認例である。地理的な位置より、南魚沼にある飯綱山10号墳の壺形埴輪の出現には、北関東・上野からの系譜・影響が示唆される(橋本1996)。なお、5世紀後半のこの時期、焼成に窯が採用されていない点は、恒常的な需要がなく、埴輪工人集団を招請することなく臨時に土師器製作集団に製作させたからであろう。

ところで、10号墳の壺形埴輪に関しては、壺形土器と壺形埴輪との両面からの検討が望まれよう。前者、壺形土器としては、この時期の県内の土器編年の中で、どのあたりに位置づけられるであろうか。飯綱山古墳群の存在する地元、六日町では飯綱山古墳群の北、蟻子山古墳群の至近東方で金屋遺跡が調査されている(山本1985)。金屋遺跡下層の土器群の主体を占めるのは、古墳時代中期のもので、その中には単口縁の壺形土器が目立ち、二重口縁の壺形土器は見られない。一方、上層の古墳時代後期とされる土器群の中には、1点二重口縁の壺形土器が認められる。飯綱山10号墳のものに比べると、口縁部の立ち上がり、頸部の長さ共に短く、段部が弱くなって退化傾向がうかがわれる。これに伴って出土した底部の多くは、飯綱山10号墳に特徴的に見られる凹み底、いわゆる輪台成形(円環貼り付け)の技法によるものである。また、飯綱山10号墳例には多量の初痕を持つものが見られたが、金屋遺跡上層土器群の中に3点初痕を持つ土器片が確認されており、関連性が注目される。金屋遺跡下層の土器群には、須恵器は伴わないらしく、一方上層の土器群にはC地区西側側道出土の須恵器有蓋高坏の蓋のTK47型式が関連する。となると、飯綱山10号墳の副葬品から示された5世紀後半の年代観とも矛盾しない。なお、金屋遺跡下層土器群の単口縁壺形土器の中に1点、胴部に焼成後の円形の穿孔が認められるものが存在し、注目される。以上、飯綱山10号墳例は、金屋遺跡下層土器群と同・上層土器群との間に位置づけられる。

新潟県内の古墳時代中・後期土器の編年に関しては、品田高志氏(品田1989)、川村浩司氏(川村1988)らが試みられている。この種の二重口縁壺形土器が残存する資料としては、品田編年Ⅱ期1段階の柏崎市の礼坊遺跡SK-2a土坑例、Ⅱ期2段階の月岡遺跡SE21・SE3例などがあげられる。このうち、後者は金屋遺跡上層例に近いものである。一方、飯綱山10号墳例は前者に近似し、若干上がる傾向がある。5世紀第Ⅲ四半世紀の年代が与えられる。

最近の資料では、新津市舟戸遺跡例が金屋遺跡上層土器群に先行するものとされる(川上1995)が、このうち壺C-Ⅳ類としたものが飯綱山10号墳例の二重口縁壺形土器に類する。また、同じく新津市沖ノ羽遺跡Ⅱ(B地区)でも退化した二重口縁壺形土器が出土している(星野ほか1996)。

なお、当地方の土器群の中では、十日町市馬場上49号住居址(阿部1987)にTK47型式の須恵器坏身が伴い、近接した時期のものと考えられる。

一方、透かし孔を持つ壺形埴輪の類例としては、兵庫県処女塚古墳例(千種1989)、大阪府小石

透かし孔を持つ壺形埴輪

- 1: 兵庫・処女塚 2: 大阪・小石塚 3: 山梨・甲斐銚子塚  
 4: 山梨・岡銚子塚 5: 群馬・堀之内DK-4号  
 6: 群馬・下郷天神塚 7: 群馬・文珠山 8: 群馬・朝子塚  
 9: 埼玉・鷲山 10: 埼玉・塩第I支群1号 11: 茨城・葦間山  
 12: 茨城・上出島2号 13: 千葉・新皇塚 14: 新潟・飯綱山10号

肩部・頸部に透かし孔を持つ朝顔形埴輪

- a: 福岡・立山山8号 b: 熊本・前田 c: 大阪・大石塚  
 d: 奈良・布留 e: 三重・堀田 f: 三重・高田2号  
 g: 長野・森將軍塚 h: 長野・土口將軍塚 i: 群馬・白石稲荷山  
 j: 群馬・三島塚 k: 群馬・御富士山 l: 埼玉・雷電山  
 m: 神奈川・小金塚

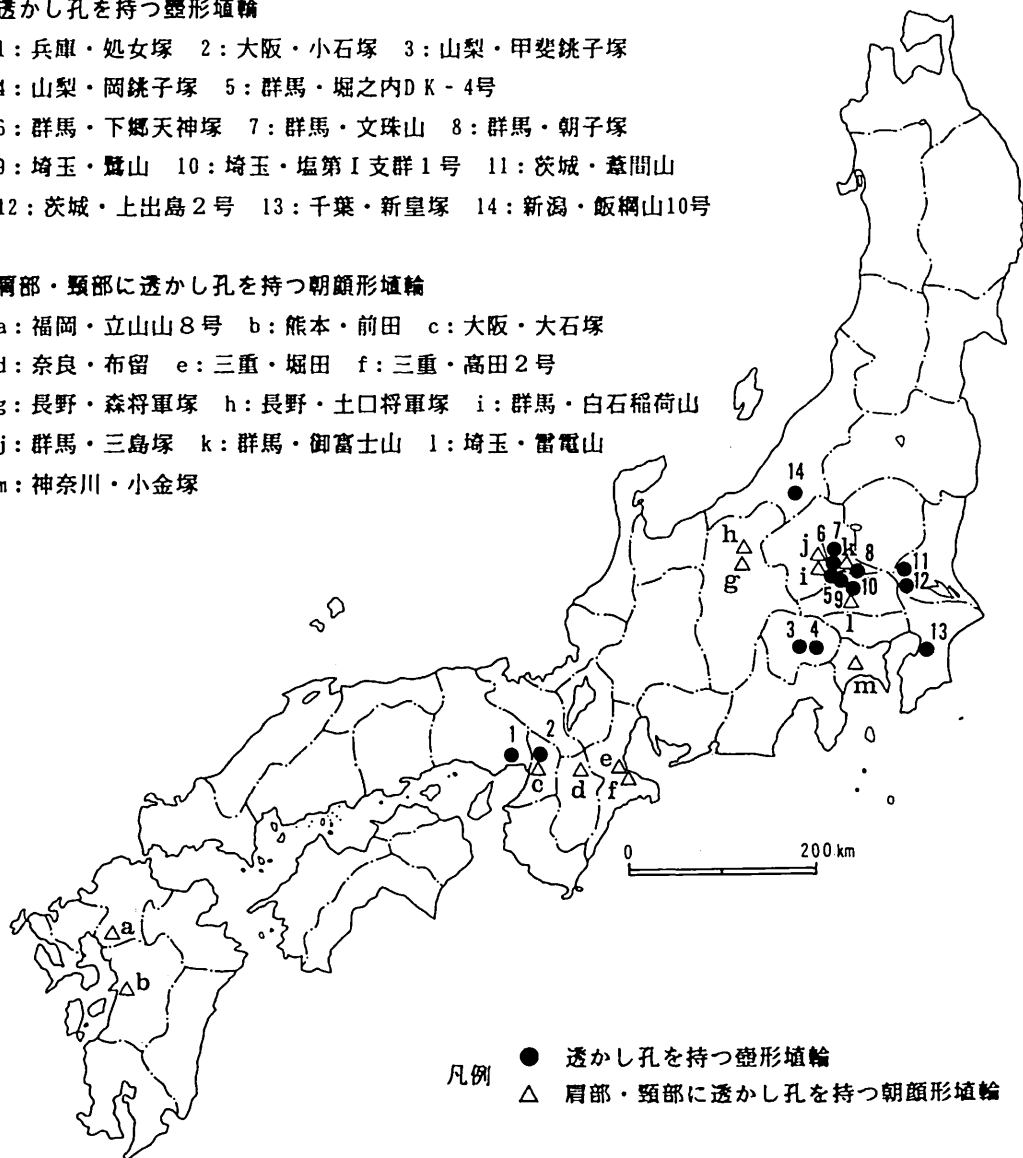


Fig. 15 透かし孔を持つ壺形埴輪, および肩部・頸部に透かし孔を持つ朝顔形埴輪の分布

塚古墳例(森1989b), 山梨県甲斐銚子塚古墳例(坂本1987), 同・岡銚子塚古墳例(伊藤1995), 群馬県朝子塚古墳例(尾崎ほか1968:102-107), 同・堀之内DK-4号墳例(荒巻1982)<sup>(1)</sup>, 同・文珠山古墳例<sup>(2)</sup>, 同・下郷天神塚古墳例(巾1980:118), 栃木県大榎塚北古墳例<sup>(3)</sup>, 茨城県葦間山古墳

(1) 群馬県藤岡市教育委員会志村 哲氏によれば、堀ノ内遺跡群では他の近接する遺構からも同様な透かし孔を持つ壺形土器が出土しているとのことである。  
 (2) 群馬県前橋市文珠山古墳における表面採集資料で壺形埴輪肩部に透かし孔のあることを確認した。  
 (3) 小田孔が蜂の巣状に空いた特殊な壺形土器を地元で実見した。これに類するものとしては、孔は貫通しないが、群馬県高崎市谷中村東B遺跡例(白石1985)がある。

例(日高・田中1996a), 同・上出島2号墳例(日高・田中1996b), 埼玉県鷺山古墳例(坂本1986), 同・塩第I支群1号墳例(新井1995), 同・中の山古墳例(若松1989), 千葉県新皇塚古墳例(斎木・種田1974)などが挙げられる。このうち、須恵質の埼玉県中の山古墳例は時期的にも下り、須恵器の技法も見られて異質である<sup>(1)</sup>。また、古くは庄内式併行の福岡県津古生掛古墳から胴部中央よりやや下方に円形の穿孔を穿つ底部穿孔二重口縁壺形土器が出土している(宮田1989)。しかし、これは胴部下位に小円孔を穿つ土器との関連でとらえた方がよい。

これらの多くは1個体程度の確認例であるが、底部穿孔以外に胴部あるいは頸部・口縁部に透かし孔を持ちさらに仮器化が進行しており、埴輪と呼んでも差し支えないものである。おおかた

出土古墳名	墳形	墳丘規模	部位	透穴形態	底部穿孔
兵庫・処女塚	前方後方	70m	口縁・肩	円	○
大阪・小石塚	前方後円	49m	頸	円	○
山梨・甲斐桃子女塚	前方後円	167m	口縁・胴	巴・円	○
山梨・岡桃子女塚	前方後円	84m	胴	巴	
群馬・朝子塚	前方後円	124m	口縁・胴	巴・円	○
群馬・堀ノ内DK-4	前方後方	—	口縁・肩	三日月・楕円	○
群馬・文珠山	円	50m	胴	円か	(○)
群馬・下郷天神塚	前方後円	84m	胴	三角	
茨城・葦間山	前方後円	120m	頸・胴	三角	○
茨城・上出島2号	前方後円	56m	頸	三角	○
埼玉・鷺山	前方後方	60m	口縁	円	○
埼玉・塩第I支群1号	前方後方	38m	口縁	円	○
千葉・新皇塚	前方後方	約60m	胴	円	○
新潟・飯綱山10号	円	36m	胴	あけび形	×

Tab. 3 透かし穴を有する壺形埴輪集成表

前期に遡る資料である。特に、このうち埴輪配列の判明している飯綱山10号墳例は底部を抜かなくなっているが、円墳の墳頂部外縁を円筒埴輪列と同様に同種多量の壺形が取り巻く。これらの分布を見ると、東国、関東に集中する傾向があり、特に北関東、群馬に多い(Fig.15)。この地域で発達した可能性が高い。

次に、壺形埴輪の変遷案を示す(Fig.16参照)。

(1)中の山古墳出土「須恵器埴輪」が埼玉県寄居町の須恵器窯址群、末野遺跡のF区3号窯で焼成されていたことが判明した(福田1998)。

I 期 [4世紀前葉：鷺山，塩第I支群1号墳]

二重口縁の段部の突出が強い。胴部径が口縁部径を上回る。口縁部高が頸部高を凌ぐ。すなわち、頸部が短い。胴部は偏平で、胴部径より胴部高が小さい。底部を作ってから焼成前に中央部を穿孔する。ハケ目調整。外面底部付近まで丁寧に赤彩する。

II 期 [4世紀中葉：堀之内DK-4号墳，処女塚]

口縁部径と胴部径，口縁部高と頸部高がほぼ等しい。ハケ目調整。

III 期 [4世紀後葉：朝子塚，甲斐銚子塚]

口縁部径が胴部径を凌ぐ。口縁部の巨大化。底部いっぱいには穿孔する。調整は依然ハケ目が使用される。

IV 期 [5世紀前葉：上出島2号墳]

頸部，胴部の長大化。底部は穿孔を意図して初めから作らなくなる。ハケ目調整主体からヘラナデ調整主体への転換。ただし，ハケ目調整は客体的に残る。口縁部高を頸部高が上回るものも現われる。

V 期 [5世紀後半：飯綱山10号墳]

二重口縁の段部は突出が弱くなる。底部を穿孔しないものも現われる。ハケ目調整の消失。調整はヘラナデ調整による。

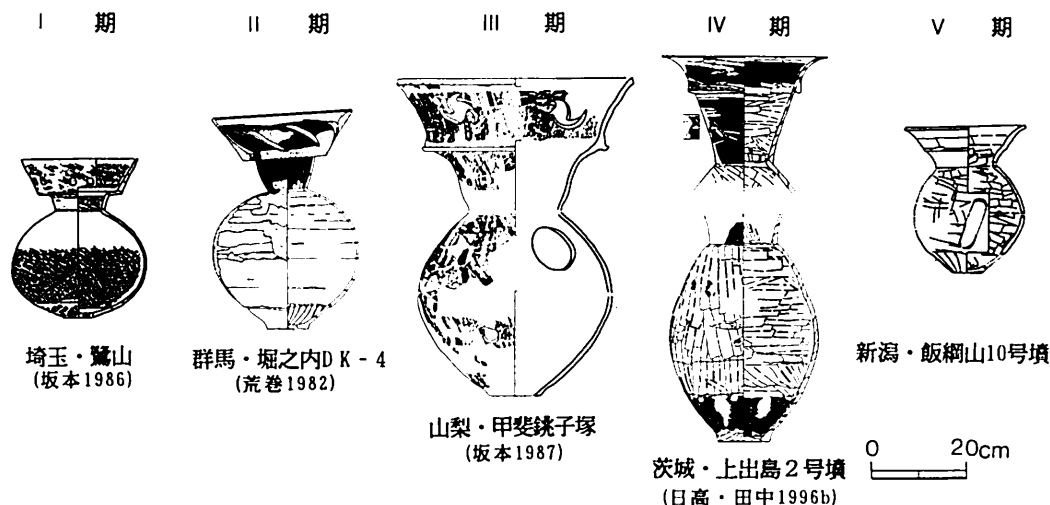


Fig.16 壺形埴輪変遷図

まず，口縁部に透かし孔を穿つものが前期前半に出現してくる。埼玉県鷺山古墳・塩1号墳など前方後方墳に見られる。同じく前方後方墳の兵庫県処女塚古墳では円形竹管文と円形透かし孔を持つ二重口縁壺形土器が出土している。口縁部の円形透かし孔の出現には，山陰系土器の影響か庄内式土器の壺に見られるような円形竹管文の影響があると考えられる。ちなみに，処女塚古墳例には肩部にも円形竹管文と円形透かし孔が存在する。新しい傾向であろう。前期後半では，プロポーションとしては，群馬県堀之内DK-4号墳例が先行する。その口縁部には，三日月形の透かし孔を入れる。続いて，山梨県甲斐銚子塚古墳例の口縁部に三巴の透かし孔が存在する。これには，吉備型特殊器台に系譜を引く円筒埴輪からの影響が窺われる。同例には胴部にも円形ないし巴形の透かし孔が認められる。同じ地域圏の同県岡銚子塚古墳例の胴部にも巴形透かし孔が確

認されている。両者には密接な関係が想定されよう。類例は群馬県朝子塚古墳にある。なお、吉備型特殊壺の例であるが、群馬県下郷天神塚古墳例には肩部に三角形透かし孔がある。また、茨城県葦間山古墳例には頸部に三角形の透かし孔が見られる。千葉県新皇塚古墳例にも胴部下に円形透かし孔が存在する。さらに、5世紀に入って前葉には茨城県上出島2号墳例が胴部の長胴化、頸部の長大化などに新しい様相が窺えるが、その頸部には三角形の透かし孔が開く。先の同一地域圏の葦間山古墳例からの影響が示唆される。最後に、最も新しい資料として5世紀後半の新潟県飯綱山10号墳例が挙げられる<sup>(1)</sup>。二重口縁の段部に退化がうかがわれる。底部を穿孔しないものの、胴部にあけび形の透かし孔が対向位置に存在する。飯綱山10号墳例のあけび形透かし孔の類例としては群馬県堀之内DK-4号墳例が指摘できる。しかし、両者の間には時間的懸隔がある。

前述したように、飯綱山10号墳の埴輪の系譜としては、地理的に隣接する上野との関わりが深いものと考えられる。ただし、上野では、この時期の透かし孔を有する壺形埴輪は確認されていない。もう一つ系譜が考えられる地域として、信濃川本流の上流地域、北信地域との関連である。しかし、当該地方には透かし孔を持つ壺形埴輪は今のところ認められない。信濃では、森將軍塚古墳で肩部に透かし孔を持つ朝顔形埴輪が知られている(稲村1992)。5世紀前半代には、更埴市土口將軍塚古墳で頸部に透かし孔を有する朝顔形埴輪が存在する(佐藤1987)。その後、その善光寺平に入った埴輪は、変容しながら南下して南信の天竜川流域、伊那谷の飯田地域に入る。口縁部に透かし孔を穿つ高岡4号墳例(小林・佐合1990)などはその系譜であろう。また、飯綱山10号墳と同様な木芯鉄板張輪鏝を持つ飯田市新井原2号墳の朝顔形埴輪(渋谷1997)は、壺形埴輪に2条の突帯を貼ったような形態を呈している。別に存在する円筒埴輪とは胴部形態を異にし、異質である。突帯間に方形の透かし孔を開けるが、5世紀後半の時期にこの種の例が存在するのは注目に値する。また、同県喬木村郭5号墳例は肩部に1条の突帯を持ち、その下に円形の透かし孔を開ける。底部はすぼまり、胴部が張って壺形の形態を呈する。6世紀に下るとされ、さらに退化が進んだ例である。これら南信の諸例はいずれも外面調整にナデを多用している(藤川1992)点でも注目される。なお、これらは東海地方、静岡を経由し、天竜川を遡上して流入したものではなからう。

一方、東海地方、伊勢湾周辺の三重でも松阪市高田2号墳のように、朝顔形埴輪の肩部に円形透かし孔を穿つ例が認められる(穂積1997)。また、嬉野町堀田遺跡からは肩部に三角形の透かし孔を4孔配する朝顔形埴輪が出土している(中川・西村1996)。前者は南関東、相模の小金塚古墳の埴輪(久保ほか1985)との関連性が示唆される。いずれも川西編年(川西1978)Ⅱ期の円筒埴輪に相当する。なお、これら胴部に透かし孔を持つ壺形埴輪を器台円筒に載せたものを合体させた形の、肩部に透かし孔を穿つ朝顔形埴輪の例としては、他に熊本県松橋町前田遺跡例(置田1977)、大阪府豊中市大石塚古墳例(森1989a)、奈良県天理市布留遺跡例(置田1977)、長野県更埴市森將軍塚古墳例(稲村1992)、群馬県藤岡市白石稲荷山古墳例(志村1986, 1987)、同高崎市三島塚古墳例(田村1996)、同伊勢崎市御富士山古墳例(後藤1921:4)、埼玉県東松山市雷電山古墳例(佐藤・坂本1986)などが挙げられる。また、朝顔形埴輪の頸部に円形透かし孔を穿つ例として、長野県更

(1) 青山博樹氏は「底部穿孔壺祭式」の変遷として、それを様相Ⅰ～Ⅳに細分している。当飯綱山10号墳例の場合は底部を穿孔していないものの、その様相Ⅳに相当すると考えられるが、様相Ⅳの分布は千葉県北部から茨城県南部に限られるという(青山1998)。しかし、その分布に関しては再考が迫られよう。

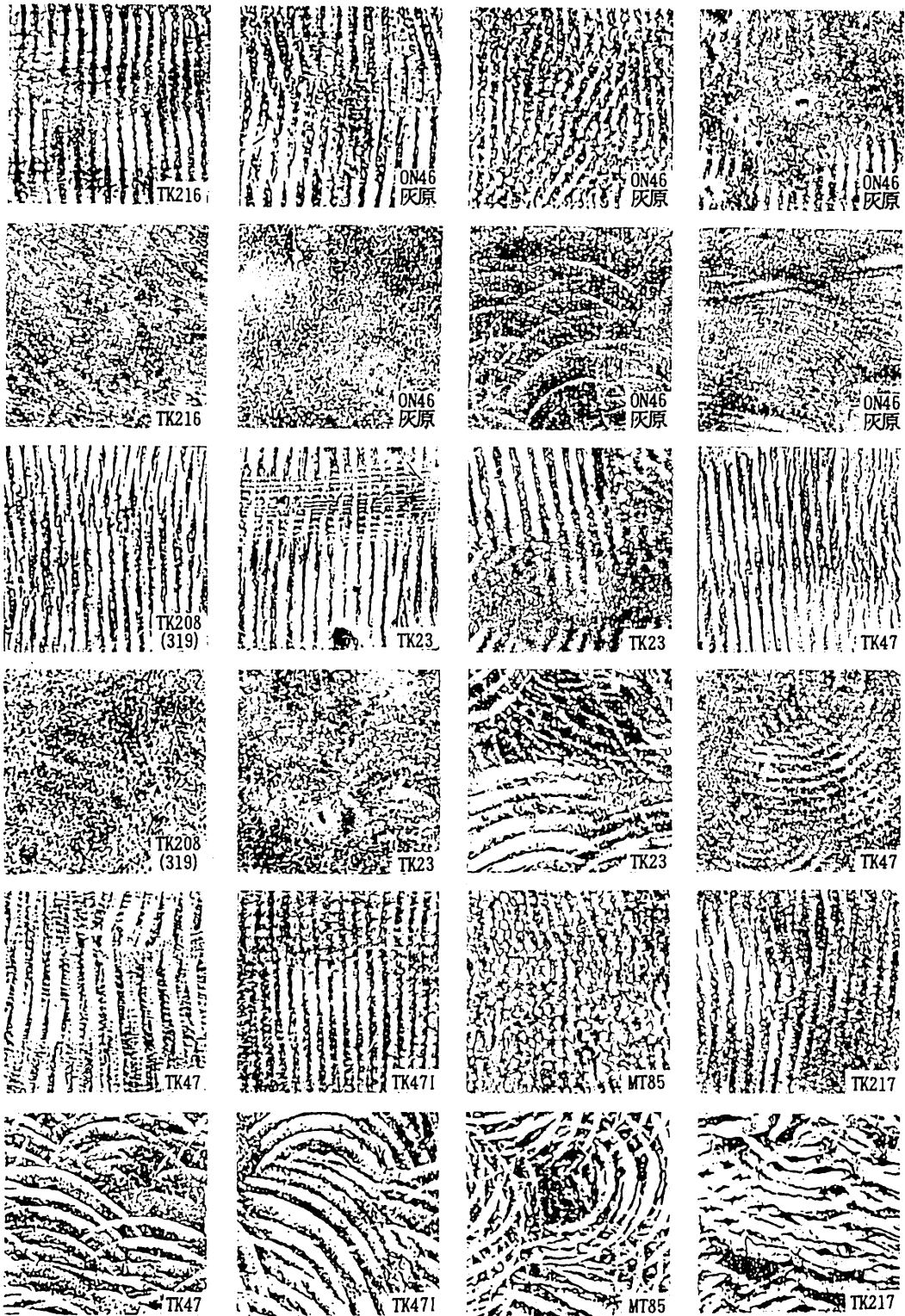


Fig. 17 比較資料：大阪府陶邑古窯址群 出土須恵器大甕 叩き目、当て具痕 (3/4)



埴市土口將軍塚古墳例(佐藤1987)が認められる。以上、東国の諸例では、5世紀第Ⅱ四半世紀まで肩部・頸部に透かし孔を穿つ朝顔形埴輪が存在する。また、この種の朝顔形埴輪が先の透かし孔を有する壺形埴輪の集中する北関東、上野、北武蔵、北信を中心に分布している点も、両者の関係が緊密であったことを物語っている。この点からも、飯綱山10号墳の壺形埴輪の上野からの系譜が示唆される。

なお、この新潟県地域に円筒埴輪が導入されず、壺形埴輪が採用された背景には、地位差というよりはその系譜差が想定される。

#### (5) 須恵器

保守的な壺形埴輪の存在の一方で、墳頂部には須恵器の大甕が置かれていたようである。新しい祭祀形態の導入がうかがわれる。須恵器大甕は、口縁部を欠き、確実な年代は知れないが、内面の青海波の当て具痕の様相や、それを消し残している点から、TK23型式以降、TK47型式併行と考えられる。外面の叩き目、内面の当て具痕ともに陶邑TK47号窯のもの(Fig.17)に酷似する<sup>(1)</sup>。よって、5世紀後半の年代観とは齟齬をきたさないであろう。しかし、地元飯綱考古博物館所蔵の飯綱山10号墳出土と考えられる「大塚遺物」の墨書のある須恵器甕のTK208型式の年代観とは整合しない。「大塚」とは飯綱山古墳群にあって10号墳のことと考えられるが、過去の調査記録には須恵器の出土は記されていない。故に、出土状態の明かでない当資料を積極的に評価するのは厳に慎まねばならない。仮に、当資料が10号墳に伴ったとしても、副葬されていたか否かは不明である。

#### (6) 主体部

主体部の位置は、Fig.18に示すように墳丘の中心から若干南にずれている。よって、他に埋葬施設のある可能性がある。

主体部の構造は、明治21年当時の発掘跡が複雑なため、十分に把握できなかったが、竪穴系埋葬施設と推定され、西側端部の底面礫数が認められた。内法の大きさは、長さ3m程度、幅70cm程度、高さ40cm程度が想定復元された。明治期の調査では、偏平な河原石を立てて中を仕切り、平行な2室を構成する石室とされる(斎藤1932:33)。しかし、今回の調査では1基しか確認できなかった。我々の調査での出土遺物の中に、明治期の発掘で確認された「東部にある石室」から出土したという副葬品のうち横矧板鍔留式短甲や鉄鏃等の同じ品目が含まれており、「東部にある石室」だけを今回は発掘した可能性がある。だが、真偽の程は、再調査をまたねばならない。

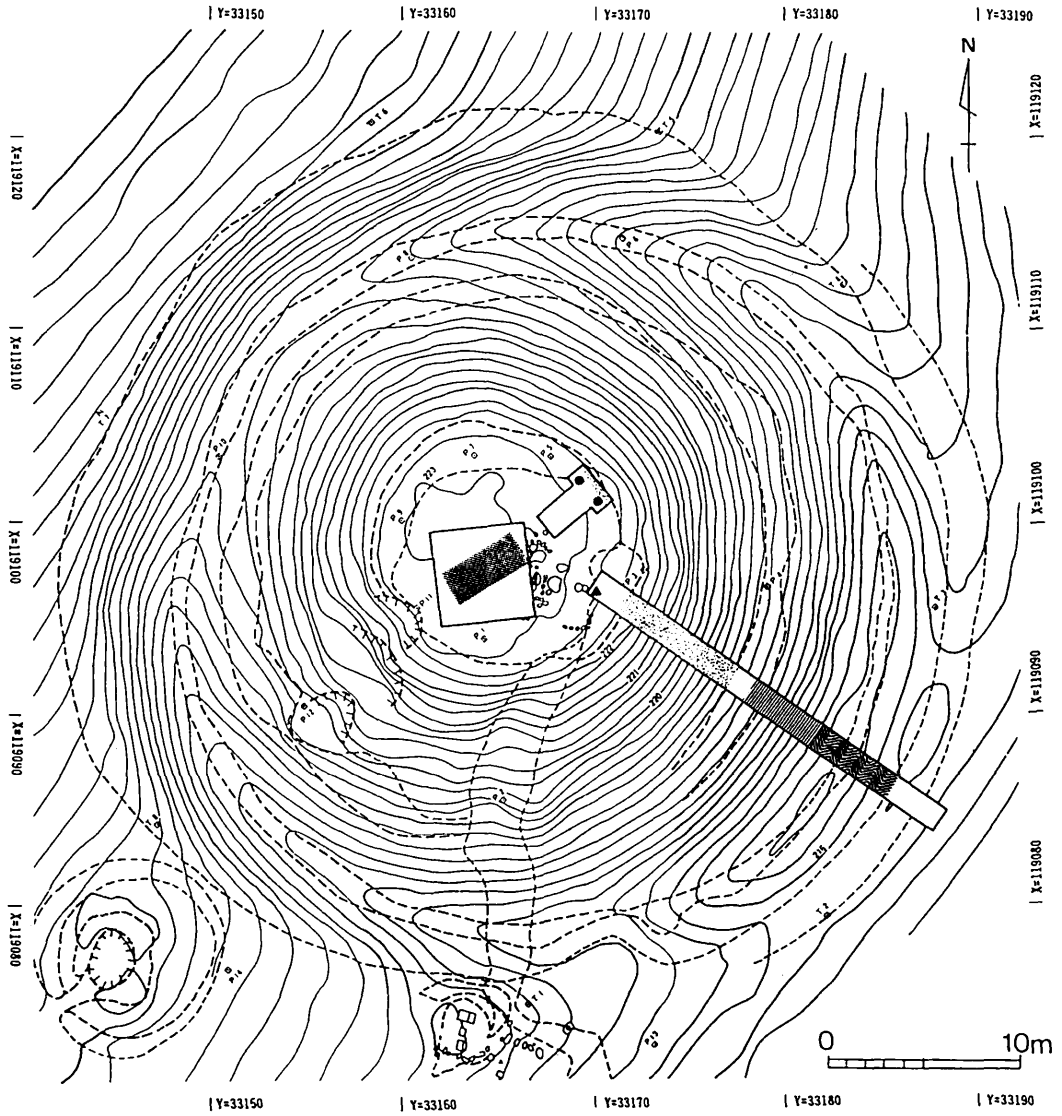
①現在墳頂部に遺存する石材に板状石材が多い点、②主体部長側の平行する石材抜き取り穴、③付近ではほぼ同時期の蟻子山古墳群の主体部に板石を立てる例が多い点、④「偏平な河原石を立てて中を仕切る」という明治期の発掘の記録などから、箱式石棺状竪穴式石室が想定される。

類似した構造の主体部は今のところ、この新潟県地域では近接する同町蟻子山古墳群などを除くと知られていない。飯綱山古墳群に近い蟻子山古墳群中最大の5号墳では、偏平石の上に小礫を敷き、その上に偏平石を縦位に二重に囲み、石と石の間に小礫を詰めた石室があったという(金子ほか1977)。他に蟻子山古墳群<sup>(2)</sup>では、樹形山の安山岩の偏平な河原石を縦にして小口側に二重、三重に重ね、側壁に偏平な板石をほぼ1石ずつ置く箱式棺状のものがあり、河原石の裏込めが僅かに認められる。偏平な石の舗石は見られないようである。一方、偏平な河原石の舗石

(1) 平安学園高校に所蔵されている陶邑窯址群の標識資料で確認した。

(2) 六日町蟻子山古墳群のテニスコート造成時の調査成果に関して池田亨氏に御教示いただいた。

飯綱山10号墳発掘調査報告



- 凡例
- 壺形埴輪
  - ▲ 須恵器大甕
  - 主体部
  - ▨ 葺石
  - 墳丘斜面
  - ▤ 周溝

Fig.18 10号墳各遺構・遺物関連図

を敷くものもあるが、こちらにも偏平なやや大きめの河原石を敷き、側石とすべく立てているらしい。裏込めには円隙が使用されている。これらの大きさ、年代が気になるところであるが、いずれにせよ木棺直葬でない石材を使用した埋葬施設が存在する点で飯綱山10号墳との関わりが注目される。なお、蟻子山の南側尾根上では石材を使用しない木棺直葬墳、87号墳も存在したらしい(池田1973)。

地理的に関係の深い群馬県地域では、類例として北毛の子持村朝田遺跡(石井1998)などで箱式石棺状の竪穴系埋葬施設を持つ古墳が確認され、吾妻川流域でも中之条町石ノ塔古墳(松本1981c)などが認められる。また、榛名山東麓の箕郷町街道橋1号古墳1号・2号両「石室」(右島1981)や赤城山南麓の大胡町5号古墳・6号古墳(松本1981a・1981b)、赤堀町達磨山古墳A号・B号両「石室」(尾崎1981)に構造的に近い。これらは偏平な板石を立てて側石としているが、いずれも高さが1石分で30cm程度と低く、別に棺を納める空間的な余裕がない。「棺」、「槨」、「室」の概念からすれば、直接遺骸を入れたものと考えられ、「槨」、「室」の概念には当たらない。しかし、「棺」が可搬性のあるものと規定した場合は不都合であるが、現場で組み立てたものもあるとした場合はそれが最も現実に近いものであろう。これらが榛名山二ツ岳火山灰降下前のいずれも5世紀後半代のものである点、飯綱山10号墳の主体部の系譜を求める上で妥当であろう。ただし、舗石の有無や石材の違い等、細部は異なり、変容も考えられる。なお、地理的に見て他に北信地域との関連性も注目されるが、群馬県地域ほど似たものは管見に触れない。

4-1~4で、小黒智久氏は埋葬施設の復元とその系譜を探る中で、本古墳の石室を、遺存する石材などから河原石積み竪穴式石室と推定した。比較的遺存の良好な南西部の状況から小口に板石を立てていた可能性は薄く、一部長側に回った部分にも河原石の小口積み認められることから先のように想定したものであるが、長側方向の平行する2列の窪みをどのように理解するのかという問題が残る。これに関しては、「石材の抜き取り穴」という解釈を採っている。

河原石積み竪穴式石室の類例は、山梨県茶塚古墳(小林1980)、群馬県今井神社古墳、若田大塚古墳(田島1981)、正円寺古墳括れ部墳頂(松本1981d)等、管見にふれる限りごく限られている。このうち、茶塚古墳例は前代の丸山塚古墳等の割石小口積み竪穴式石室の変容という考え方と、新たな外来的様相という見方ができる。丸山塚古墳が前期末に遡る前期古墳で、茶塚古墳の5世紀後半とは半世紀以上の時間的懸隔があり、甲府盆地内の5世紀前半の実態が不明であるので前者の説は採りにくい。よって、横剗板鋸留式短甲や木芯鉄板張輪鍔、三環鈴など飯綱山10号墳と同様、副葬品に窺える朝鮮半島、伽耶からの影響という可能性も捨てきれない。この時期、朝鮮半島百濟では割石小口積み竪穴式石室が見られる(李1995:305-352)。

なお、飾履やこれまた飯綱山10号墳と同様な三環鈴・鈴・木芯鉄板張輪鍔等を出土した群馬県箕郷町谷ツ古墳(田口1988・1998)の場合は小口側に大きな河原石を長手4段に積んでいるようであるが、側壁は河原石の小口積みらしい。墳丘を覆う火山性堆積物との関係やTK47型式の須恵器から飯綱山10号墳に近い5世紀後葉の時期が想定される。この谷ツ古墳は上段が積み石式の方墳で特異である。被葬者に渡来人が想定されているが、埴輪を持つなど倭的要素も見られる。これと類似したのが前橋市正円寺古墳括れ部墳頂の例である。前方後円墳の後円部には初期の両袖型横穴式石室があるが、これは6世紀前半に遡るものである。それとはほぼ併行して竪穴式石室が構築されている。小口側は3~4段の河原石の長手積みで、長側壁は河原石の小口積みである。床には約5cmの厚さに玉砂利が敷かれている。最大長1.7m、最大幅45cm、高さ44cmと小さいが、よく似ている。

今井神社古墳は、5世紀後半の竪穴式石室を持っていたと考えられる前方後円墳である。天井石に縄掛け突起様の作り出しがある。壁体で使用していたと考えられる河原石の小口面に赤色塗彩の痕跡が見られる。よって、河原石小口積みと推定した。

若田大塚古墳は東西軸の竪穴式石室とされるが、横穴式石室の可能性もある。壁体は自然石乱石積みである。横穴式石室となれば、北西に開口することになる。一方、天井石のレベルが揃うのか気になるところである。玄室と羨道の境界とも推定される部位では壁体を構成する石材の目が通り、注目される。また、構築面が低く、横穴式石室的である。刃部断面が三角形となる銚が出土しており、6世紀初頭に降る例である。

長野では5世紀中葉の長野市舞鶴山2号墳(岩崎1983)、更埴市土口將軍塚古墳に比較的似た竪穴式石室が存在する。前者は河原石積みであるが、後者は割石小口積み竪穴式石室である。この石材の差は自然的要因に左右され易いものと考えられる。以上、北信もまた関連地域の有力な候補地である。

ところで、飯綱山10号墳では主体部の位置が高く、被覆が薄い可能性が考えられた。最近の群馬県地域の調査例では、渋川市半田南原26・27号墳例(大塚1994)、同・畑中B遺跡1号墳例(小林1995)などのように火山性堆積物下の良好な資料から同様に主体部上の被覆が無い、あっても薄い例が知られるようになってきた。この点も群馬県地域との関連性が暗示される。被覆が薄いと盗掘者の餌食になってしまうが、当時の人々には死体を封じ込める一方で、外からの侵入者には壺形埴輪等の呪力によって侵入が防げるものと信じられたのであろう。

なお、飯綱山10号墳の主体部の石材は、蟻子山古墳群同様偏平な安山岩を使用しており、西方の榊形山から供給されたものと考えられる。他に、石英閃緑岩、輝緑岩などの石材を確認できた<sup>(1)</sup>。蟻子山の段丘礫層のサンプリングでは、玄武岩が50%、石英斑岩・輝緑岩・流紋岩・泥質砂岩が各々12.5%という結果で、飯綱山10号墳主体部関連の石材サンプリングでは安山岩66%、石英閃緑岩22%、輝緑岩11%となっている。一方、魚野川の六日町周辺の河川礫のサンプリング・データ(「川原の石」調査グループ1977)では、石英閃緑岩31%、斑礫岩28%、輝緑岩15%、安山岩10%と続く。これらのデータを見ると、隣接する蟻子山の段丘礫層のデータを勘案し、魚野川の河川礫を採集して供給している可能性も考えられる。しかし、飯綱山古墳群をのせている魚沼丘陵の礫層部中には、石英閃緑岩、安山岩、輝緑岩型礫層が存在し、意外と近くから供給していると推定される。ただし、主体部の板状の安山岩礫は比較的大型で榊形山等から意図的・選択的に採取しているものと思われる。

また、主軸が、記録にみられる南北ではなく、東西により近いことがうかがわれる。この点からも横穴式石室の可能性は低いものと考えられる。埋葬頭位に関しては情報が無いが、東頭位の可能性がある。新潟県地域では前期段階に東頭位が卓越しているようである(小林1989)が、その伝統という見方と、この時期前期段階の北頭位優位から東頭位優位に変化した上野地域の影響という見方のいずれも成り立とう。主体部の構造などを勘案して後者の見方を採りたい。なお、この時期、隣接する北信地域でも東頭位が卓越する。この現象はかなり広範に見られるものと考えられる(橋本1986)。その背景には前期段階の北頭位優位の中国からの影響より、中期段階の東頭位優位の朝鮮半島からの影響へという転換が示唆される。それは、飯綱山10号墳の短甲や馬具などの副葬品にうかがわれる半島色の濃さという点からも傍証される。

(1) 石材の鑑定に当たっては、新潟大学理学部小林巖雄・吉村尚久両先生のお世話になった。

## (7) 副葬品

主体部攪乱層中より、鉄斧の完形品1点をはじめ、短甲片、鉄鍬、馬具等が出土している。このうち、鉄斧は10号墳のこれまでの副葬品リストに無かったものである。肩部の張り出しの無い無肩鉄斧とされるもので、古瀬清秀氏分類(古瀬1991)の有袋鉄斧B類に相当する。さらに、長さ9cm、刃部幅3.4cmの大きさからそのうちのB2類に当たる。X線撮影により、袋部中央にひびが縦に見られ鍛造品と考えられるが、肉眼的には袋部の合わせ目が不明瞭なほど密着した優品である。保存処理後の所見では、刃部先端から約2cmの所で袋部の合わせが切れており、刃部の素材と袋部の素材とをその部分で結合したことがうかがわれる。金田義敬氏による有袋鉄斧の製作技法からの分類(金田1995)ではBⅡ技法に相当し、類例として、みそのお遺跡3号墳のものが挙げられる。編年的には無肩の古墳時代中期後半ということで、飯綱山10号墳の年代観と符合する。

短甲は、横剗板鋸留式短甲で鉄覆輪をもつものは、覆輪の幅などから飯綱考古博物館所蔵資料と同一個体の可能性が高い。また、鋸の直径8mmの大ぶりなものは、鉄覆輪のもの可能性が大である。一方、鋸の直径6~7mmの小ぶりなものは六日町文化会館展示の革包覆輪のもの想定される。両者とも接合関係の有無を検討したが、確実な接合部位は見だしえなかった。年代は5世紀後半代の時期に比定されよう。なお、記録(滝沢1910)に残る三角板鋸留式短甲の存在は確認できなかった<sup>(1)</sup>。よって、現存する2領とも、10号墳から出土したと見てほぼ間違いあるまい。

鉄鍬は先に述べように、長頸片刃鍬と長頸三角形鍬の2種類を確認できた。そのうち、前者は逆刺が短いこと、後者の鍬身が片丸造りであること、そして両者とも頸部が長く台形状の関を有する点などから茨城県三味塚古墳や千葉県東間部多古墳に類例のある杉山秀宏氏編年(杉山1988)のⅧ期に比定され、須恵器編年のTK23型式~TK47型式併行期に位置づけられた。これは、松尾昌彦氏による北信、善光寺平南部地域出土鉄鍬の変遷のⅢ期に相当する。片刃箭鍬は上池ノ平5号墳のものに類似する。5世紀後半~末のものであろう(松尾1992)。

馬具は今回の調査で木芯鉄板張輪鐙の存在を初めて確認した。柄の頭部や踏込み部を欠き、確実なことは言えないが、千賀氏分類(千賀1988)のI B b式になるものと推定される。柄部分の中央に稜を持つ形態の特徴より、5世紀第Ⅲ四半世紀に遡るもので、新潟県内では最古の馬具である。部分破片で全容は知れないが、国内では山梨県茶塚古墳例に類似し、国外では、韓国陝川玉田M2号墳、高豊池山洞32号墳等、伽耶の古墳出土品に類例がある(金1996)。伽耶地域からの舶載品であろう。その他、明治期の発掘調査によって、馬具が出土しているが、その中には伽耶系の轡も含まれており、その系譜関係が注目される<sup>(2)</sup>。なお、この木芯鉄板張輪鐙は、古く小野山節氏が新旧I・Ⅱ式の2型式に分類したものの中間型式に属すると考えられる<sup>(3)</sup>が、飯綱山10号墳の馬具セットは小野山氏の言うI式の馬具セットとされる馬鐙・三環鈴はあるものの杏葉が

(1)飯綱山10号墳からは、古記録(滝沢1910)によると三角板鋸留式短甲と横剗板鋸留式短甲の各1領が出土したことになるが、現存する短甲は横剗板鋸留式短甲のみ2領ということで、不可思議な状況になっていた。その解釈として、一つには当時の記録が不正確であること、もう一つには遺物が取り換わってしまったことなどが考えられる。古記録を検討した結果、前者の可能性が極めて高いことが判明した。よって、10号墳の副葬品のリストから三角板鋸留式短甲の品目は削除することにする。詳細は別稿に譲りたい。

(2)詳細に関しては別稿を予定している。

(3)小野山節氏は、輪鐙の柄が比較的太く、短く、柄の頭部が丸く、柄につながる部分と踏込み部分とが同じ厚さ、同じ幅に作られていて、柄と輪の接合部前後の面だけに鉄板を当てるものをI式、柄が細長く、柄の頭部が角張って、踏込みの部分が輪の上部よりもずっと厚くなって、幅は逆に少し狭まって四面全体を鉄板で覆ったものをⅡ式に分類したが、柄の基部の太さは2.6cmでⅡ式のものに近い。

ないという段階に相当する古いセット関係を示している（小野山1966）。

以上、副葬品からの年代観としては、飯綱山10号墳の年代は、5世紀後半代と考えられる。

#### （8）まとめ

飯綱山10号墳はその墳丘規模や外部施設、副葬品内容等から飯綱山古墳群中の主墳という位置とともに、南魚沼地域の広域の盟主墳という地位が与えられよう。ただし、墳丘規模や墳丘形態から見て、上越、頸城地域を含めた広域首長墓とすることはできない。

5世紀後半のこの時期、飯綱山10号墳と同様な三環鈴を副葬する有力な古墳が列島の東西に築造された。埼玉県埼玉稲荷山古墳と熊本県江田船山古墳がそれである。両者からは「獲加多支鹵大王」銘を持つ刀剣が出土している。飯綱山古墳群出現の背景には、雄略朝の施策が反映しているものと考えられる。『日本書紀』雄略天皇8年2月条は、南下、侵攻した高麗軍から新羅を救援する目的で、若狭の大首長と想定されている膳臣斑鳩が將軍として派遣されたことを伝えている。この記事と符合する若狭の西塚古墳等の考古学的諸事実が中司照世氏により指摘されている（中司1993:110-112）。その副葬品に見られる朝鮮半島色と、この越後、飯綱山10号墳の副葬品内容とが極めて類似していることは重視される。中司氏も指摘しているように、10号墳の小型馬鐸・環鈴・銅鈴（田中1992）などは半島からの将来品であろうし、その他馬具類等も前述のとおり伽耶地域からの舶載品の可能性が高まった。銅鈴は先の西塚古墳や加賀の二子塚孤山古墳のものとも共通する。以上から、飯綱山10号墳の被葬者は、生前飯綱山古墳群の初期群集墳を構成する配下を率いて若狭の大首長の下に軍事編成として加わったものと理解したい。ただし、それは直接的なものではなく、飯綱山古墳群の地理的位置や、その主体部、埴輪・葺石等の外部施設の系譜関係から見て、上野の勢力を介してのものとも考えられる。

## 2) 今後の課題

今回確認した10号墳の主体部の年代観に関しては、鉄覆輪を持つ横矧板鋸留式短甲の編年や長頸鏃の編年から5世紀後半という年代が妥当であろう。しかし、本古墳出土と伝えられる六日町文化会館展示資料のような革包覆輪の横矧板鋸留式短甲の存在は確認できなかった。飯綱考古博物館所蔵の「大塚遺物」の墨書銘のあるTK 208型式の鏃に関しても同様である。別に主体部があるのか否か、今後の検討課題である。また、明治期の発掘記録では、馬鐸が主体部外で出土したとある（斎藤1932:33）が、これが棺外副葬品であるのか、別の主体部の棺内副葬品であるのかなど検討の余地がある。さらに、壺形埴輪の配列や他の土器（土師器、須恵器）との関係なども、より詳細に明らかにしなければならないだろう。

他に10号墳の主体部の構築法、テラス部分の構造解明、外堤の存否のチェック、山側の葺石構築状態の把握などが課題としてあげられる。さらには、10号墳出土遺物の地元資料との突き合わせや、本古墳と同規模の27号墳の築造年代の追究と、周辺の小古墳の発掘調査を経て、古墳群全体の構造の解明を図りたい。そして、この初期群集墳を地域史の中に位置づけると同時に、列島ひいては東アジア世界の中でとらえなおしたい。また、古墳時代中期と後期の境界、時期区分の問題についても併せて考えてみたい。

（橋本 博文）

### <謝辞>

末筆ながら、調査と資料整理、報告文の作成に当たって、以下の機関および個人各位にお世話になった。記して、謝意を表わす。

（橋本 博文）

新潟県教育委員会、新潟県企画調整部企画課、六日町教育委員会、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団、相川之英、甘粕 健、荒川隆史、荒木勇次、池田 亨、奥西藤和、加部二生、菊地芳朗、栗田則久、小林巖雄、小林正春、志村 哲、岡塚英嗣、中司照世、荻本 勝、藤原敏秀、穂積裕昌、三木 弘、三ツ井朋子、宮 昌之、山本 肇、余語琢磨、吉村尚久、若井 綾、渡邊朋和、渡辺裕之

#### 参考文献

- 青山博樹 1998 「土器④ 東北南部」『前期古墳から中期古墳へ』:7-16 東北・関東前方後円墳研究会  
 阿部恭平 1987 「馬場上遺跡」『第8回三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第Ⅱ分冊:414-416 千曲川水系古代文化研究所  
 甘粕 健 1986 「群集墳の発生」新潟県編集・発行『新潟県史』通史編1 原始・古代:335-343  
 新井 端 1995 「埼玉県大里郡江南町塚古墳群」『日本考古学年報』46(1993年度版):462-465 日本考古学協会  
 荒巻 実 1982 「第Ⅵ章第3節 底部穿孔壺形土器を伴う墳墓について」『A1堀ノ内遺跡群』:728-746 群馬県藤岡市教育委員会  
 池田 亨 1973 『六日町の文化財』:30-31 自費出版  
 石井克己 1998 「波川・北群馬にみる火山災害と遺跡」『ぐんま地域文化』第10号:10-13 (財)群馬地域文化振興会  
 伊藤修二 1995 『山梨県指定史跡 岡・鉢子塚古墳 一保存整備報告書一』:37, 39 八代町埋蔵文化財報告書第9集 八代町教育委員会  
 李 南典 1995 『百済石室墳研究』学研文化社  
 稲村 繁 1992 「森将軍塚古墳の埴輪とその系譜」『史跡森将軍塚古墳 一保存整備事業発掘調査報告書一』:519-525 更埴市教育委員会  
 岩崎卓也 1989 「箕鶴山1・2号墳」社団法人 長野県史刊行会編集・発行『長野県史 考古資料編』全1巻(2) 主要遺跡(北・東信):386-391  
 遠藤和子・桜井節子 1979 「第四章 埋葬主体部」小林広和・里村晃一編『甲斐茶塚古墳』:17-24 山梨県教育委員会  
 大塚昌彦 1994 『半田南原遺跡』波川市発掘調査報告書第40集:234-250 波川市教育委員会  
 大西智和 1996 「墳丘に現れた価値 一福岡県老司古墳を主な事例として一」『日本考古学』第3号:1-19 日本考古学協会  
 置田雅昭 1977 「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第3号:37-58 日本考古学会  
 尾崎喜左雄 1981 「速磨山古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3・古墳』:653-656 群馬県  
 尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治 1968 『石田川』「石田川」刊行会  
 小野山節 1966 「日本発見の初期の馬具」『考古学雑誌』第52巻第1号:1-10 日本考古学会  
 金子拓男・戸根与八郎・駒形敏朗・冢田順一郎・高橋陽子・佐藤泰治 1977 「伊予乃郡の古墳」『南魚沼』:413-453 新潟県文化財調査年報15 新潟県教育委員会  
 金田善敬 1995 「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代吉備』第17号:61-79 古代吉備研究会  
 加部二生 1998 「アーネスト・サトウ著『上野地方の古墳群』の学史的位罫」『国立歴史民俗博物館研究報告』第76集:93-119 国立歴史民俗博物館  
 川上貞雄 1995 『舟戸遺跡発掘調査報告書』:1-128 新津市教育委員会  
 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号:1-70 日本考古学会  
 川村浩司 1988 「越後の古墳時代中後期の土器について」『新潟考古学談話会会報』第1号:23-25 新潟考古学談話会  
 「川原の石」調査グループ 1977 「信濃川水系の石をたずねて」『新潟の自然』第3集:63-74 新潟県学校教育用品株式会社  
 金 斗喆 1996 「韓国と日本の馬具 一両國間 埴輪年調律一」『4・5世紀の日韓考古学』:85-112 九州考古学会・嶺南考古学会

- 桐原 健 1989 「安坂古墳群」社団法人 長野県史刊行会編集・発行『長野県史 考古資料編』全1巻(3) 主要遺跡(中巻)：231-234
- 久保哲三・後藤喜八郎・茂木克美・中野 隆・中島洋一・山本 靖・小高安博・岩崎裕二・加藤秀正・草柳卓二・遠藤秀樹 1985 『専修考古学』第2号—伊勢原市小金塚古墳調査報告—：69-71 専修大学考古学会
- 後藤守一 1921 考古學會編集・発行『考古図集』14集
- 小林隆幸 1989 「前期古墳の埋葬頭位」『保内三王山古墳群』：126-129 三条市教育委員会
- 小林広和・里村晃一編『甲斐茶塚古墳』山梨県教育委員会
- 小林正春・佐合英治 1990 『高岡遺跡—高岡3・4号墳』 飯田市教育委員会
- 小林良光 1995 『行幸田畑中B遺跡』淡川市発掘調査報告書第48集：30-31 淡川市教育委員会
- 斎木 勝・榎田齊吾 1974 『市原市菊間遺跡』：3-43 (財)千葉県都市公社
- 斎藤秀平 1932 「南魚沼郡余川群集墳」『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯：24-36 新潟県
- 坂本和俊 1986 「鷺山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』：5-22 埼玉県史編さん室
- 坂本美夫 1987 「甲斐跳子塚古墳出土の壘形埴輪」『考古学雑誌』第72巻第4号：134-141 日本考古学会
- 佐藤好司・坂本和俊 1986 「雷電山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』：80-110 埼玉県史編さん室
- 佐藤信之 1987 「3 出土遺物 A埴輪」『長野県史跡土口将軍塚古墳』：42-58 長野市教育委員会・更埴市教育委員会・更埴市教育委員会
- 品田高志 1989 「越後における古墳時代土器の変遷—柏崎平野の中期～後期を中心に—」『柏崎市立博物館館報』No.4：93-116 柏崎市立博物館
- 渋谷恵美子 1997 『特別展 伊那谷の馬 科野の馬』：23 飯田市美術博物館・飯田市上郷考古博物館
- 志村 哲 1986 『白石稲荷山古墳 範囲確認調査報告書』I：27-29 藤岡市教育委員会
- 志村 哲 1987 『白石稲荷山古墳 範囲確認調査報告書』II：15-21 藤岡市教育委員会
- 白石 修 1985 『谷中村東B遺跡』高崎市文化財調査報告第60集：1-29 高崎市教育委員会
- 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄器について」榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集』第8：529-644 吉川弘文館
- 高橋克壽 1998 「古墳時代の造形—埴輪」『考古学による日本歴史』12 芸術・学芸とあそび：40-44 雄山閣
- 滝沢又一 1910 「越後国南魚沼郡余川村免見の鏡・轡・古鏡につきて」『考古界』第1篇第7号：32-35 考古学会
- 田口一郎 1988 「13 群馬県下芝・谷ツ古墳」日本考古学協会編・刊『日本考古学年報 39』：420-425
- 田口一郎 1989 「群馬県西部における初期横穴式石室の様相」『第10回 三県シンポジウム 東日本における横穴式石室の受容 第2分冊』：578-616 千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所
- 田口一郎 1998 「下芝・谷ツ古墳の飾履が提起する問題—東国の渡来文化研究II—」『日本考古学協会第64回総会研究発表要旨』：94-97 日本考古学協会
- 田島桂男 1981 「若田大塚古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3：302-305 群馬県
- 田中 裕 1992 「小型埋葬施設出土の日本初期の鈴」『史跡森将軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』：536-544 更埴市教育委員会
- 田村 孝 1996 「三島塚古墳」『平成7年度高崎市小規模埋蔵文化財発掘調査報告書』：1-35 高崎市教育委員会
- 千賀 久 1988 「日本出土初期馬具の系譜」榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集』第九：33-48 吉川弘文館
- 千種 浩 1989 「処女塚古墳」『第25回埋蔵文化財研究集会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅲ分冊—近畿篇—：556-557 埋蔵文化財研究会
- 土屋 穰 1996 「第一部 大星山古墳群」土屋 穰・青木一男・町田勝則編『上信越自動車道埋蔵文化財調査報告書 7—長野市内その5— 大星山古墳群・北平1号墳』：3-101 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 田海鏡正 1998 「黒田古墳群—古墳時代中期の群集墳の調査—」『発掘調査報告会'98』：7-9 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土口将軍塚古墳調査会事務局編 1987 『長野県史跡土口将軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』長野市教育委員会・更埴市教育委員会
- 中川 明・西村美幸 1996 『堀田遺跡第3次発掘調査概報』三重県埋蔵文化財調査報告139：1-15 三重県埋蔵文化財センター



- 中司照世 1993 「日本海中部の古墳文化」『新版古代の日本』7 中部：99-118 角川書店
- 中司照世 1998 『能登のまほろば 能登王墓のロマンを語る古墳シンポジウム』：9-15 鹿西町・古墳シンポジウム実行委員会
- 橋本博文 1985 「埴輪の出現」『季刊考古学』第20号：18-22 雄山閣
- 橋本博文 1986 「V.まとめ」『古海原前古墳群発掘調査概報』：19-25 群馬県邑楽郡大泉町教育委員会
- 橋本博文 1996 「埴輪のおこり」『石の埴輪・木の埴輪・土の埴輪』：12-16 福岡県総務部国立博物館対策室
- 巾 隆之 1980 「II下郷遺跡 4.検出された遺構と遺物 (3)古墳 S Z 46」『下郷』：111-134 群馬県教育委員会
- 東山信治 1997 「飯綱山古墳群10・27号墳の構造について」新潟大学考古学研究室編・刊『飯綱山古墳群(10・27号墳)測量調査報告』：23-27
- 日高 慎・田中 裕 1996a 「茨城県出島村田宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』第7号：83-106 筑波大学歴史・人類学系
- 日高 慎・田中 裕 1996b 「上出島2号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡II』岩井市史遺跡調査報告書 第2集：114-134 岩井市史編さん委員会
- 福田 聖 1998 「末野からさきたまへ」『埋文さいたま』第29号：6 埼玉県立埋蔵文化財センター
- 藤川美和 1992 「森2号墳出土埴輪をめぐる諸問題」『史跡森將軍塚古墳 一保存整備事業発掘調査報告書一』：526-530 更埴市教育委員会
- 藤田和尊 1989 「武器・武具」『季刊考古学』第28号：39-43 雄山閣
- 古瀬清秀 1991 「農工具」『古墳時代の研究』8 古墳II・副葬品：71-91 雄山閣
- 星野信明・石川智紀・亀井功・木村康裕・佐藤正知・高橋保雄・田海義正 1996 『磐越自動車道関係発掘調査報告・沖ノ羽遺跡II(B地区)』：71 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 徳積裕昌 1997 『三重の埴輪』：5 三重県埋蔵文化財センター
- 松本浩一 1981a 「『綜覧』大胡町5号古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3・古墳』：106-110 群馬県
- 松本浩一 1981b 「『綜覧』大胡町6号古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3・古墳』：110-113 群馬県
- 松本浩一 1981c 「石ノ塔古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3・古墳』：515-519 群馬県
- 松本浩一 1981d 「正円寺古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3・古墳』：64-70 群馬県
- 右島和夫 1981 「街道橋1号古墳」『群馬県史 資料編3 原始古代3・古墳』：331-334 群馬県
- 右島和夫 1993 「上野における群集墳の成立」『関西大学考古学研究室創設四十周年記念考古学論叢』(1994 学生社刊『東国古墳時代の研究』第2章：63-92に再録)
- 森 幸三 1989a 「大石塚古墳」『第25回埋蔵文化財研究会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅲ分冊一近畿篇一：12-13 埋蔵文化財研究会
- 森 幸三 1989b 「小石塚古墳」『第25回埋蔵文化財研究会 古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅲ分冊一近畿篇一：14-15 埋蔵文化財研究会
- 山本 肇 1985 『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 金屋遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第37：86-100 新潟県教育委員会
- 若松良一 1989 「V 中の山古墳の調査」『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書 第7集：75-116
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」都出比呂志編『古代史復元 6 古墳時代の王と民衆』：105-119 講談社